

ゲーテの輪廻概念と靈魂不滅思想 （モナド、エンテレヒー）について ——資料を中心に

ツグラッゲン・エヴェリン

目次

はじめに

第1章 若きゲーテの輪廻概念

第2章 60代のゲーテの輪廻概念について（モナド・靈魂不滅）

第1節 「靈魂」と「モナド」について

第2節 「死の瞬間」「モナドのもっている意想」について

第3節 「モナドが現世で死んだのちにたどる歴史」「モナドの未来」「輪
廻概念」について

第4節 「千度もここにいたことがあるにちがいない」「輪廻概念」について

第5節 「知識と信仰」と「証明できないもの」について

第3章 晩年・最晩年のゲーテの靈魂不滅・永遠性の思想について

第1節 精神の永遠性について

第2節 「エンテレヒー」「モナド」「エンテレヒー的モナド」（靈魂不滅）について

おわりに

引用文献及び参考文献

1. はじめに

本論文では、ゲーテの輪廻概念と靈魂不滅思想について論じる。ゲーテは輪廻や靈魂不滅を信じていたのだろうか、という議論が度々なされているが、この議論に関して本論文では、ゲーテが「輪廻」、「靈魂不滅」、「モナド」や「エンテレヒー」について発言した箇所を時系列でまとめ、多少の注釈を付して解釈していく。既に翻訳があるものはそのまま引用し、訳がない場合には筆者が訳した。必要に応じて、ドイツ語の原本も載せる。

第1章で、若きゲーテの輪廻概念を紹介し、第2章で60代のゲーテの輪廻概念について論じる上で、ゲーテのモナドと靈魂不滅についての考えを示す。次に、第3章では晩年・最晩年のゲーテの靈魂不滅と永遠性の思想を紹介し、精神の永遠性やエンテレヒー、モナドやエンテレヒー的モナドについて論じる。

第1章 若きゲーテの輪廻概念

Goethe an Wieland

(Fragment) April 1776 (?)

Ich kann mir die Bedeutsamkeit – die Macht, die diese Frau über mich hat, anders nicht erklären als durch die Seelenwanderung. – Ja, wir waren einst Mann und Weib! – Nun wissen wir von uns – unverhüllt, in Geisterduft. – Ich habe keine Namen für uns – die Vergangenheit – die Zukunft – das All.¹

ゲーテからヴィーラント宛て

(断片)

1776年4月(?)

1 FA 2, 33

私にとってのあの女性の重要性—威力は輪廻でしか説明することができない。—はい、私たちはかつて夫と妻だった！—私たちは今、私たちのことを知っている—あからさまに、靈の香りの中。—私は私たちのための名前を持っていない—過去—未来—宇宙。²

この手紙の断片には日付がない。成立年代に関しての唯一の手掛かりは1776年4月14日に書かれた以下の詩である。この詩の内容は手紙の断片の内容に似ており、輪廻 (Seelenwanderung) について書かれている。ヴィーラント宛ての手紙の中でゲーテはシャルロッテ・フォン・シュタインの影響について述べようとしている。ゲーテは前生でシュタイン夫人と夫婦だったことを感じていた。さらに、以下の詩は1776年4月14日に書かれたシュタイン夫人宛の手紙からである。ゲーテはこの詩を書写することなく、また保存することもなく、手紙としてシュタイン夫人に送った³。詩の中では、ゲーテがシュタイン夫人に対しての感情、また彼女との深い縁について述べて、彼女が前世に彼の妹、あるいは妻だったと述べている。

Aus Briefen an Charlotte von Stein

Weimar, 14.4.1776

Warum gabst du uns die Tiefen Blicke
Unsre Zukunft ahndungsvoll zu schau
Unsrer Liebe, unserm Erdenglücke
Während selig nimmer hinzutraun?
Warum gabst uns Schicksal die Gefühle
Uns einander in das Herz zu sehn,
Um durch all die seltenen Gewühle

2 筆者訳 FA 2, 33

3 参照 : Goethe: Gedichte (1974: 520)

Unser wahr Verhältnis auszuspähn.

Ach so viele tausend Menschen kennen
Dumpf sich treibend kaum ihr eigen Herz,
Schweben zwecklos hin und her und rennen
Hoffnungslos in unversehnem Schmerz,
Jauchzen wieder wenn der schnellen Freuden
Unerwarte Morgenröte tagt.
Nur uns Armen liebevollen beiden
Ist das wechselseitige Glück versagt
Uns zu lieben ohn uns zu verstehen,
In dem Andern sehn was er nie war
Immer frisch auf Traumglück auszugehen
Und zu schwanken auch in Traumgefahr.

Glücklich den ein leerer Traum beschäftigt!
Glücklich dem die Ahndung eitel wär!
Jede Gegenwart und jeder Blick bekräftigt
Traum und Ahndung leider uns noch mehr.
Sag was will das Schicksal uns bereiten?
Sag wie band es uns so rein genau?
Ach du warst in abgelebten Zeiten
Meine Schwester oder meine Frau.

Kanntest jeden Zug in meinem Wesen,
Spähtest wie die reinste Nerve klingt
Konntest mich mit Einem Blicke lesen
Den so schwer ein sterblich Aug durchdringt.

Tropftest Mäßigung dem heißen Blute,
Richtetest den wilden irren Lauf,
Und in deinen Engelsarmen ruhte
Die zerstörte Brust sich wieder auf,
Hieltest zauberleicht ihn angebunden
Und vergaukeltest ihm manchen Tag.
Welche Seligkeit glich jenen Wonnestunden,
Da er dankbar dir zu Füßen lag.
Fühlt sein Herz an deinem Herzen schwellen,
Fühlte sich in deinem Auge gut,
Alle seine Sinnen sich erhellen
Und beruhigen sein brausend Blut.

Und von allem dem schwebt ein Erinnern
Nur noch um das ungewisse Herz
Fühlt die alte Wahrheit ewig gleich im Innern,
Und der neue Zustand wird ihm Schmerz.
Und wir scheinen uns nur halb beseelet
Dämmernd ist um uns der hellste Tag.
Glücklich daß das Schicksal das uns quälet
Uns doch nicht verändern mag.⁴

シャルロッテ・フォン・シュタイン宛の手紙の中から
ヴァイマル、1776年4月14日

あなたはなぜ、私たちに深い洞察の目をさずけたの
私たちの未来を予感して見るため

私たちの愛を、私たちの地球上での幸福を
盲目的に信じさせてはくださらぬためなのか？
運命よ、私たちになぜこの気持ちをさずけたの
互いに相手の隠れた心中を読み取り、
不思議な情熱のもつれの中から
私たちの真実の関係を偵察するためののか。

ああ、多くの何千の人々は
鈍感に流されながら、おのれの心を知らぬ。
目的も分からず、あちらこちらへ流され、
思いもよらぬ苦痛から逃れようと、希望なく走っている。
突然ふいに、よろこびの曙光が射すと、
たわいなく大声をあげて歓呼している。

深い愛を湛えた可愛いそうな私たちにだけ、
互いが理解せぬままに愛しあい、
互いに取りかわす幸福が拒まれている。
相手の中にありもせぬものを夢想し、
いそいそと仮初めの一夜の幸福を追いもとめ、
とりとめない夢でしかない危難に身をふるわすというのに。

むなしい夢にふける人は幸い！
むなしい予感で化粧する人は幸い！
私たちの目と私たちの存在は、否応もなく、
夢や予感をたちまち深い真実へかえてしまう。
教えて、運命は私たちに何をしようとするのだろう。
教えて、なぜ運命は私たちを純粹にきっちり縛ったのだろう。
ああ、あなたは前世で、

私の妹か、私の妻だった。

既にあなたは私の存在のあらゆる性質をのみこみ、
胸の中の琴線のかすかなふるえを聞きとり、
誰も窺い知ることのできぬ
私の内部を一目でみてしまった。
熱い血汐に一滴の鎮静剤をしたたらせ、
荒れ狂う血の逆流に正しい方向をあたえた。
天使のようなあなたの腕のなかで、
疵ついた私の胸もやっと安らぎをとりもどした。

魔法の糸のような目にみえぬもので、私は縛られ、
数日をまぼろしのように楽しく過した。
あなたの足もとに身を横たえていた一時の
感謝にみちた幸福は、何ものにもたとえようがない。
あなたの胸にふれて、私の胸はいっぱいになり、
あなたの目に映ったわが姿をいとおしみ、
感覚のすべてが明るくすみわたるのを覚え、
やがて狂おしい胸の動悸は静まった。

しかし、このような幸福も、いつかの日の灰か（ほのか）な思い出のよう
に
定かならぬ心の回りを漂うだけ、
永久に変わることはない真実が、私たちの内部にあるかぎり、
この新しい状態は彼に苦痛となる。
私たちは、半分しか生きていないように、
私たちの周りの明るい昼の光も黄昏みたい。
私たちを苦しめる運命が、ただいつまでも、

私たちを変えないことが、せめて残された幸福かもしれない。⁵

この詩の時代背景としては、当時、ヴァイマルで頻繁に「輪廻」というテーマについて議論されていた⁶。この詩はアナムネージス詩 („Anamnesis-Gedicht“) とも呼ばれている。ゲーテがシュタイン夫人を前世の妹か妻として見ることは、輪廻概念によると、今世の魂が前世のことを顕現し、想起 (アナムネージス) していることである⁷。アナムネージスという言葉はプラトンから由来している。以下の「水の上の霊らの歌」 („Gesang der Geister über den Wassern“) という詩もゲーテの輪廻概念を示している。

水の上の霊らの歌

人間の魂は
水に似ている――
天より来
天に登り
また下っては
地に帰る
永遠に変転しながら

そそり立つ岩壁から
ほとばっては
清冽な滝となって
美しく
雲としぶき

5 筆者訳 FA 1, 229-231

6 参照：FA2, 730-731

7 参照：FA2, 731

滑かな岩上に降り
軽やかに受けとめられては
薄紗をひるがえしつつ
水音もひそかに
谷深く落ちてゆく

岩々に
堰かれては
噴然と泡立ちつつ
段また段と
流下する

草原に流れ入っては
平らかなる河床を
音もなくうねりゆき
鏡なす湖面となつては
月星の影を映す

風は波の
やさしい恋びと
風はまた泡立つ巨濤を
その底より沸き返らせる

人間の魂
それはまこと水に似ている！
人間の運命
それはまこと風に似ている！⁸

1779年10月に作成した詩である。同年スイス旅行の途次、10月9日にラウターブルンネンのシュタウプバッハの滝を見物した際の直接的印象が契機となって、「人間の魂は水に似ている」とするかつての思いを新たにしたものであろう。200数十メートルの岩壁からほとぼしり出て、空中にしぶいて落下するこの滝の景観は第二節に歌われているとおりである。この詩は自由韻律 (freie Rhythmen) の詩である⁹。

第2章 60代のゲーテの輪廻概念について (モナド・靈魂不滅)

ゲーテの同時代人であるフリドリッヒ・ウィルヘルム・リーマーの書籍『ゲーテについての報告』(Mitteilungen über Goethe)の中にヨハンネス・ダニエル・ファルクについての章がある。リーマーによると、ファルクがゲーテについての情報を第三者から聞いて、伝えた可能性があるため、ファルクの情報の信用性は低いそうである¹⁰。その上、リーマーはゲーテ自身が書簡と全集の中で一度もファルクの名前を取り上げたことがないため、ゲーテとファルクの関係はファルクが言ったように親しくなかったと推測した¹¹。しかし、現在はゲーテが実際にファルクの訪問を1813年1月25日の日記に記したため¹²、リーマーの発言が間違っている可能性があると考えられている。

以下のゲーテとファルクとの対話が1813年1月25日に、ヴィーラントの葬儀の日に行われた。ファルクは、ゲーテがヴィーラントの死の時に記したスピーチ「ヴィーラントへの義兄弟の記念に」(„Zu brüderlichem Andenken Wielands“)と、『詩と真実』の中のヴィーラントについての発言を知ってい

9 参照：ゲーテ (1979) 『ゲーテ全集1』418ページ

10 参照：Riemer (1921: 40)

11 参照：同上、40ページ

12 GT 5.1, 13

たに違いない¹³。本論文で示すように、ゲーテとファルクの対話で論じる輪廻概念と靈魂不滅についての考えは、他のゲーテの発言にも似ているため、ゲーテの考えが対話の中で良くまとめていると思われる。

ゲーテがヴィーラントの詩をきっかけにファルクと共に靈魂不滅について論じる。ファルク対話の最初のところに、ゲーテは「自然における全現象の出発点」である「根源構成要素」を「靈魂」さらに「モナド」と呼び、定義している。「モナド」はドイツの哲学者・数学者であるライプニッツの概念である。ライプニッツはその哲学において、肉体と魂の調和を求め、真に存在するものはモナドというモナド的実体であると論じている。肉体と物体は「延長」であり、「現象」にすぎない、対して魂はモナド的な実体である¹⁴。

第1節「靈魂」と「モナド」について

Falk (1824) Mo. 25.1.1813

(. . .) „Sie wissen längst“, hub er an, „daß Ideen, die eines festen Fundaments in der Sinnenwelt entbehren, bei all ihrem übrigen Werte für mich keine Überzeugung mit sich führen, weil ich, der Natur gegenüber, wissen, nicht aber bloß vermuten und glauben will. Was nun die persönliche Fortdauer unserer Seele nach dem Tode betrifft, so ist es damit auf meinem Wege also beschaffen. Sie steht keineswegs mit den vieljährigen Beobachtungen, die ich über die Beschaffenheit unserer und aller Wesen in der Natur angestellt, im Widerspruch; im Gegenteil, sie geht sogar aus denselben mit neuer Beweiskraft hervor.

Wie viel aber, oder wie wenig von dieser Persönlichkeit übrigens verdient, daß es fort dauere, ist eine andere Frage und ein Punkt,

13 参照：FA7, 682

14 参照：エッカーマン（2001年）『ゲーテとの対話（中）』337 - 338 ページ

den wir Gott überlassen müssen. Vorläufig will ich nur dieses zuerst bemerken: ich nehme verschiedene Klassen und Rangordnungen der letzten Urbestandteile aller Wesen an, gleichsam der Anfangspunkte aller Erscheinungen in der Natur, die ich Seelen nennen möchte, weil von ihnen die Beseelung des Ganzen ausgeht, oder noch lieber Monaden – lassen Sie uns immer diesen Leibnizischen Ausdruck beibehalten!

(...) Es folgt hieraus, daß es Weltmonaden, Weltseelen, wie Ameisenmonaden, Ameisenseelen gibt, und daß beide in ihrem Ursprunge, wo nicht völlig eins, doch im Urwesen verwandt sind.“

„Jede Sonne, jeder Planet trägt in sich eine höhere Intention, einen höhern Auftrag, vermöge dessen seine Entwicklungen ebenso regelmäßig und nach demselben Gesetze, wie die Entwicklungen eines Rosenstockes durch Blatt, Stiel und Krone, zustande kommen müssen. Mögen Sie dies eine Idee oder eine Monade nennen, wie Sie wollen, ich habe auch nichts dawider; genug, daß diese Intention unsichtbar und früher, als die sichtbare Entwicklung aus ihr in der Natur, vorhanden ist“¹⁵.

1813年1月25日 ヨハネス・ダニエル・ファルク

(省略) ところで私たちの靈魂の死後の個性的存続に関していえば、その状態は以前私の道程にある。靈魂の死後の状態は、私の状態、それから自然のなかのすべての生物の状態について私がおこなった長年の観察とけっして矛盾しない。それどころかむしろその死後の状態は、あの観察の成果から新しい証明力をひきだして立ちあらわれてくる。私の個性のなかのどれほど多くのものが、あるいはどれほどわずかなものが、死後にも存続してゆくにあたいするか、それはべつの問題であり、神におまかせしなければならぬ点である。いまのところ私はまず、これだけをいっておきたい。私は全生物の最終的な根源構成要素の種々な階級

や序列を仮定している。この根源構成要素は、いつてしまえば自然における全現象の出発点であって、この要素からすべてのものの靈化がはじまるので、これを私は靈魂とよびたい。あるいはむしろモノド¹⁶（モナーデ）ともよぶころができれば——私たちはこのライプニッツの用語を手放さないようにしましょう。（省略）

その結果、蟻のモノド、蟻の靈魂と同様、世界のモノド、世界の靈魂が存在する。そして両者はその起源において、まったく同一のものとはいえないにしても、根源的本質において近親関係にある——すべての恒星、すべての惑星は自分のうちにより高い意想、より高い使命を有し、それによって彼らの発展は、バラの木の發育が葉、梗、花冠とへてゆくのと同一規則正しさで、同じ法則に従って実現されねばならない。この意想をあなたがイデーとよびたかろうと、あるいはモノドと名づけたかろうと、ご勝手である。私もそれにさからう気はない。この意想が目に見えないものであって、自然のなかでこれが目に見える形に發展する以前にすでに存在するというだけで十分である。¹⁷

「モノド」という言葉はゲーテが偶然にも靈魂不滅について論じるために用いられている。蟻から世界まで、すべてのものには靈魂、あるいはモノドがある。そして、すべてのものは目に見えない内在している「高い意想、より高い使命」をもちながら、同じ法則に従って目に見える形に發展していく。

第2節「死の瞬間」「モノドのもっている意想」について

Der Moment des Todes, der darum auch sehr gut eine Auflösung heißt, ist eben der, wo die regierende Hauptmonas all ihre bisherigen Untergebenen

16 筆者はこの対話で使われる「モナーデ」という言葉を「モノド」に書き換える。

17 ビーダーマン編（1963）『ゲーテ対話録2』207 - 208 ページ

ihres treuen Dienstes entläßt. Wie das Entstehen, so betrachte ich auch das Vergehen als einen selbständigen Akt dieser, nach ihrem eigentlichen Wesen uns völlig unbekanntem Hauptmonas.“

„Alle Monaden aber sind von Natur so unverwüstlich, daß sie ihre Tätigkeit im Moment der Auflösung selbst nicht einstellen oder verlieren, sondern noch in demselben Augenblicke wieder fortsetzen. So scheiden sie nur aus den alten Verhältnissen, um auf der Stelle wieder neue einzugehen. Bei diesem Wechsel kommt alles darauf an, wie mächtig die Intention sei, die in dieser oder jener Monas enthalten ist. Die Monas einer gebildeten Menschenseele und die eines Bibers, eines Vogels, oder eines Fisches, das macht einen gewaltigen Unterschied. Und da stehen wir wieder an den Rangordnungen der Seelen, die wir gezwungen sind anzunehmen, sobald wir uns die Erscheinungen der Natur nur einigermaßen erklären wollen.“¹⁸

だから同様に死を一つの分解とよんでもしごく適切なのであって、死の瞬間とは、支配的モナドがこれまで従属していたものたちを、その忠実な奉仕から放免してやる瞬間なのである。形成と同様に消滅もまた、この本質的には私たちに未知な主モナドの自主的行動なのである。――すべてのモナドはしかしその本性上不滅であり、分解の瞬間においてすらその活動をやめたり、失ったりすることなく、さらにこの瞬間にふたたび活動をつづけてゆくのである。こうして彼らが古い関係から離れてゆくのは、代わりにふたたび新しい場所を得るためである。この交代のさいすべてがそれにかかっていることは、これやあれやのモナドのもっている意図がどれだけ強いのか（**wie mächtig die Intention**）ということである。教養ある人間の靈魂のモナド、海狸や鳥やまたは魚のそれ、これはたいへんな相違である。そしてここに私たちはふたたび靈魂の階級秩序の問題にぶつかるのであって、私たちが自然の諸現象をいくらかでも

説明しようとおもうなら、この秩序をどうして認めざるをえないのだ。

死の瞬間に支配的モノドがこれまで従属していたものたちを放免する。例えば、肉体と物体は放免されるが、靈魂というモノド的な実体は存在し続けている。モノド自体は不滅であるから、分解の瞬間、すなわち死の瞬間においても、その活動を続けている。古い関係から離れて、代わりにふたたび新しい関係を結ぶ。それぞれのモノドがもっている意思の強さは交代において非常に重要なのである。

第3節「モノドが現世で死んだのちにたどる歴史」「モノドの未来」「輪廻概念」について

„Da haben wir völlig die Geschichte von unsern Monaden nach ihrem irdischen Ableben. Jede Monade geht, wo sie hingehört, ins Wasser, in die Luft, in die Erde, ins Feuer, in die Sterne; ja der geheime Zug, der sie dahin führt, enthält zugleich das Geheimnis ihrer zukünftigen Bestimmung.“

„An eine Vernichtung ist gar nicht zu denken; aber von irgend einer mächtigen und dabei gemeinen Monas unterwegs angehalten und ihr untergeordnet zu werden, diese Gefahr hat allerdings etwas Bedenkliches, und die Furcht davor wüßte ich auf dem Wege einer bloßen Naturbetrachtung meinstenils nicht ganz zu beseitigen.“

「ここで私たちのモノドが現世で死んだのちにたどる歴史が完全にわかる。各モノドは、おのれの属するところへゆくのである。水中へ、空中へ、地中へ、火中へ、そして星のなかへ。彼らをそこへ導く秘密の引力は、同時に彼らの未来をきめる秘密をももっている。抹殺ということ

は考えられない。しかしなにか力強い (mächtigen)、また同時に卑賤な
モナドによって途中でつかまえられ、その配下につけられるという危険
はもちろん考えられることである。これにたいする恐怖を私は、たんな
る自然観察の過程で、私としてまったく取り除くことはできないようだ』
と。²⁰

ゲーテによると、死んだ後に、モナドが方向や場所へ導く秘密の引力は、
彼らの未来を決める秘密をもっている。ここで、ゲーテの輪廻概念が既に
示されている。モナドの未来の場所、未来の世が存在するとゲーテは確信し
ている。

第4節 「千度もここにいたことがあるにちがいない」 「輪廻概念」

„Wollen wir uns einmal auf Vermutungen einlassen“, setzte Goethe
hierauf seine Betrachtungen weiter fort, „So sehe ich wirklich nicht ab,
was die Monade, welcher wir Wielands Erscheinung auf unsern Planeten
verdanken, abhalten sollte, in ihrem neuen Zustande die höchsten
Verbindungen dieses Weltalls einzugehen. Durch ihren Fleiß, durch ihren
Eifer, durch ihren Geist, womit sie so viele weltgeschichtliche Zustände
in sich aufnahm, ist sie zu allem berechtigt. Ich würde mich so wenig
wundern, daß ich es sogar meinen Ansichten völlig gemäß finden müßte,
wenn ich einst diesem Wieland als einer Weltmonade, als einem Stern
erster Größe, nach Jahrtausenden wieder begegnete und sähe und Zeuge
davon wäre, wie er mit seinem lieblichen Lichte alles, was ihm irgend nahe
käme, erquickte und aufheiterte. Wahrlich, das nebelartige Wesen irgend
eines Kometen in Licht und Klarheit zu verfassen, das wäre wohl für die

Monas unsers Wielands eine erfreuliche Aufgabe zu nennen; wie denn überhaupt, sobald man die Ewigkeit dieses Weltzustandes denkt, sich für Monaden durchaus keine andere Bestimmung annehmen läßt, also daß sie ewig auch ihrerseits an den Freuden der Götter als selig mitschaffende Kräfte teilnehmen. Das Werden der Schöpfung ist ihnen anvertraut. Gerufen oder ungerufen, sie kommen von selbst auf allen Wegen, von allen Bergen, aus allen Meeren, von allen Sternen; wer mag sie aufhalten? Ich bin gewiß, wie Sie mich hier sehen, schon tausendmal dagewesen und hoffe wohl noch tausendmal wiederzukommen.“ – „Um Verzeihung“, fiel ich ihm hier ins Wort: „ich weiß nicht, ob ich eine Wiederkunft ohne Bewußtsein eine Wiederkunft nennen möchte! Denn wieder kommt nur derjenige, welcher weiß, daß er zuvor dagewesen ist. Auch Ihnen sind bei Betrachtungen der Natur glänzende Erinnerungen und Lichtpunkte aus Weltzuständen aufgegangen, bei welchen Ihre Monas vielleicht selbsttätig zugegen war; aber alles dieses steht doch nur auf einem Vielleicht; ich wollte doch lieber, daß wir über so wichtige Dinge größere Gewißheit zu erlangen imstande wären, als die wir uns durch Ahnungen und jene Blitze des Genies verschaffen, welche zuweilen den dunkeln Abgrund der Schöpfung erleuchten. Sollten wir unserm Ziele nicht näher gelangen, wenn wir eine liebende Hauptmonas im Mittelpunkte der Schöpfung voraussetzten, die sich aller untergeordneten Monaden dieses ganzen Weltalls auf dieselbe Art und Weise bediente, wie sich unsere Seele der ihr zum Dienste untergebenen Monaden bedient?“ – „Ich habe gegen diese Vorstellung, als Glauben betrachtet, nichts“, gab Goethe hierauf zur Antwort; „nur pflege ich auf Ideen, denen keine sinnliche Wahrnehmung zum Grunde liegt, keinen ausschließenden Wert zu legen.“²¹

ゲーテはさらに彼の考察を話しつつけた。「ひとつこんどは推量をは

じめてみよう。ヴィーランドをこの惑星のうえに出現させたモノドが死後の新しい状態のなかで、宇宙の最高の結合をはじめると、なにか妨害となるようなものがあるとはおもわれない。その勤勉、その熱心、それによってあんなに多くの世界史的状况を自分のなかにとり入れたその精神、これらによってこのモノドは、どんなことにも有資格である。もしいつか私が幾千年ののち、このヴィーランドが、一つの世界モノド、いちばん大きい星となっているのであり、彼が近づいてくるものすべてをその愛らしい光でうるおし慰めているのをながめ、その証人となることがあるとしても、私はべつに不思議におもうことはなく、そのことを私の考えにまったくぴったりしていると認めるにちがいないであろう。彗星かなにかの霧のような姿を、光と明るさのなかにつかむこと、これは私たちのヴィーランドのモノドにとってよろこばしい任務といってよからう。そもそもこの世界状况の永遠性を考えると、モノドたちにとっては、しあわせに共同創造するちからとして彼らのがわでも永遠に神々と喜びを分かち合うという、これ以外の天職は認められない。創造生成は彼らにまかされている。よびだされてもよびだされなくても、彼らは自分からあらゆる道を、あらゆる山から、すべての海から、すべての星からやってくる。だれが彼らをとめようとするだろうか。私は、あなたが私をここにみているように、千度もここにいたことがあるにちがいないし、またこれからあと千度もここに帰ってきたいと望んでいる」と。失礼ですがと、ここで私は彼のことばをさえぎった。

「意識しないでおこなわれる回帰を回帰と名づけてよいものかどうか、私にはわかりません。ふたたびくるのは、以前にきたことがあると知っているものだけだからです。あなたにとっても自然観照のさいの輝かしい思い出や焦点は、あなたのモノドが多分自発的に立ちあつた世界状况からでてきたのです。しかしこれらすべてのことはやっぱり多分ということばのうえに成立しています。私はしかしこのような重要な事柄に關しては、予感とか、ときたま創造の暗い深淵を照らすあの守護神の発

する電光とかによって得られるよりももっと大きな確実性を求めることができればと望んでいたのです。私たちの靈魂が自分たちに仕えるべき従属位置にある卑賤なモノドを利用する、それと同じやりかたで、すべての従属的モノドたちを利用する一つの愛の主モノドを、創造の中心に前提してみたら、私たちは私たちの目的にいつそう近づくのではないでしようか」と。

これにたいしゲーテは答えた。

「そういう考えかたにたいして、これを信仰とみて、私は反対したい。しかし私は感覺的認識を根底にしない想念に決定的価値をおかないことにしている。（省略）²²

ここで、ゲーテとファルクは輪廻、すなわち生まれ変われについて論じている。ゲーテ自身はファルクがゲーテをここにみているように、千度もここにいたことがあるにちがいない、またこれからあと千度もここに帰ってきたいと望んで、述べている。この輪廻概念に対し、ファルクは不理解を見せ、ゲーテに問い直している。

第5節「知識と信仰」と「証明できないもの」について

„Schon bei Gelegenheit der Farbenlehre habe ich bemerkt, daß es Urphänomene gibt, die wir in ihrer göttlichen Einfalt durch unnütze Versuche nicht stören und beeinträchtigen, sondern der Vernunft und dem Glauben übergeben sollen. Versuchen wir von beiden Seiten mutig vorzudringen, nur halten wir zugleich die Grenzen streng auseinander! Beweisen wir nicht, was durchaus nicht zu beweisen ist! Wir werden sonst früh oder spät in unserm sogenannten Wissenswerk unsere eigne

Mangelhaftigkeit bei der Nachwelt zur Schau tragen. Wo das Wissen genügt, bedürfen wir freilich des Glaubens nicht; wo aber das Wissen seine Kraft nicht bewährt oder ungenügend erscheint, sollen wir auch dem Glauben seine Rechte nicht streitig machen. Sobald man nur von dem Grundsatz ausgeht, daß Wissen und Glauben nicht dazu da sind, um einander aufzuheben, sondern um einander zu ergänzen, so wird schon überall das Rechte ausgemittelt werden.”²³

(省略) 色彩論のさいすでに私は、その神的な単純さを申斐のない試みによってわずらわしたり侵害したりしないで、理性と信仰とにゆだねるべきである根源現象を認めた。私たちは理性と信仰の両方の側から勇氣をもって迫ってゆくように試みよう。しかし同時に境界を厳密にわけておこう。証明が絶対にできないものは証明しないでおこう。さもなければ遅かれ早かれ私たちは私たちのいわゆる知識作業において私たち自身の欠陥を後世にさらすことになる。知識で足りるところでは、信仰はもちろん必要でない。しかし知識が力となりえないが、またはそれが不十分にみえるところでは、私たちは信仰の権利にたいしても反対すべきでない。知識と信仰とは相抵抗するためにあるものではなく、あい補うためにあるのだという原則から出発するかぎり、それだけでもうあらゆるところで正義がみいだされることであろう」と。²⁴

ゲーテによると、自然の現象において、どうしても証明できないものがある。さらに、彼は知識で把握できないものがあるならば、信仰で把握すればよいと考え、知識と信仰は互いを補い会おうと明言している。不滅の証明についてゲーテは1822年5月15日にカンツレア・ヴォン・ミュラーとの対話の中で次のように述べている。

23 FA 7, 177-178

24 ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録2』 212 - 213 ページ

„Den Beweis der Unsterblichkeit muss jeder in sich selbst tragen, außerdem kann er nicht gegeben werden.“ „Wohl ist alles in der Natur Wechsel, aber hinter dem Wechselnden ruht ein Ewiges.“²⁵

「不滅の証明は各々が自身の中にもっていなければならない、さらにこの不滅の証明は与えることはでない。」「自然の中ですべてが変化していくだろうが、変化するものの奥に永遠なるものがある。」²⁶

靈魂不滅や輪廻というのは容易に説明できるものでも、証明できるものでもないと思われるが、ゲーテの言葉から推測するに、おそらく、人間自身の中にあり、信仰と悟りによって感じとるものと言えるだろう。

第3章 ゲーテの晩年と最晩年の輪廻概念について

第1節 精神の永遠性について

1824年5月2日にゲーテはエッカーマンと精神の永遠性について論じている。ゲーテは「靈魂」（Seele）と「モナド」という言葉を使っているが、以下の例えでは「精神」（Geist）という言葉も使って、永遠性について述べている。

私たちは、そのあいだに、ヴェービヒトの森を一まわりし、ティーフルトの近くで道を折れて、ヴァイマルへ戻りはじめたが、そこで、沈んでいく太陽をみた。ゲーテは、しばし物思いに耽っていたが、やがて、私にむかって、ある古代人の言葉を口ずさんだ。

沈みゆけど、日輪はつねにかわりじ。

「75歳にもなると」と彼は、たいへん朗かにかたりつづけた、「ときには、

25 FA 36, 252

26 筆者訳 FA 36, 252

死について考えてみないわけにいかない。死を考えても、私は泰然自若としていられる。なぜなら、われわれの精神は、絶対に滅びることのない存在であり、永遠から永遠にむかってたえず活動していくものだとかたく確信しているからだ。それは、太陽と似ており、太陽も、地上にいるわれわれの目には、沈んでいくように見えても、実は、決して沈むことなく、いつも輝きつづけているのだからね。」²⁷

ゲーテ自身は、ここで引用している「ある古代人の言葉」を、ロシアの学者でペテルブルク科学アカデミー総裁のウヴァーロフのギリシャ詩人ノンノスについての論文から知っていた²⁸。この言葉は5世紀のギリシャの詩人でパノポリス（エジプト）生まれのノンノスからの引用だと思われたが、後ほどの研究で明らかになったのは、このウヴァーロフの論文の引用文はサルデスの詩人ストラトンからの言葉であった²⁹。

ゲーテが死について考える時に泰然自若としていられる。何故ならゲーテは、われわれの精神が絶対に滅びることのない存在だと確信しているからである。精神の存在は永遠から永遠にむかって活動していくのである。それ故に75歳のゲーテは死の後の生命、そして永遠に存在し続ける生命を信じているから、死の恐怖がなかった。ゲーテは精神が永遠に絶対に滅びることのない存在だと確信した。以上の引用文でゲーテは、精神の存在を太陽の存在と比較している。太陽が沈んだ後、見えなくなるが、実は存在し続けている。太陽は沈み、見えなくなるが、次の朝にまた昇ってくる。昇ってくる太陽は、先日に輝いた太陽と同じものである。太陽の沈没は死と、そして旭日は生命の始まりと比べることができる。もし太陽を精神の存在と比較すれば、精神が死んでいる間にも存在し続けて、状況が整えた時にこの精神はまた生まれてくるように思われる。

27 エッカーマン (2001)『ゲーテとの対話 (上)』144 - 145 ページ

28 参照：エッカーマン (2001)『ゲーテとの対話 (上)』366 ページ

29 参照：FA12, 1116

第2節 「エンテレヒー」「モナド」「エンテレヒー的モナド」（靈魂不滅） について

「エンテレヒー」や「モナド」や「エンテレヒー的モナド」という言葉は、ゲーテが靈魂不滅と生命の永遠性について論じる時によく使われている言葉である。エンテレヒーというアリストテレスの概念はゲーテが晩年に使っている愛用語の一つである。エンテレヒーは一定方向へ向かう活動的な生きた力であり、決して分離できない活動的な個性である³⁰。ほぼ同じ意味で、ゲーテは「モナド」というライプニッツの概念を使用している。以下の1827年3月19日付ツェルター宛の手紙の中でゲーテはこの二つの言葉、すなわち「エンテレヒー的モナド」という複合語も使い、靈魂不滅について述べている。

Goethe an Zelter Mo. 19.3.1827

Was soll der Freund dem Freunde in solchem Falle erwidern! Ein gleiches Unheil schloß uns auf's engste zusammen, so daß der Verein nicht inniger sein kann. Gegenwärtiges Unglück läßt uns wie wir sind, und das ist schon viel.

Das alte Märchen der tausendmal tausend und immer noch einmal einbrechenden Nacht erzählen sich die Parzen unermüdet. Lange leben heißt viele überleben, so klingt das leidige Ritorell unseres vaudevilleartig hinschludernden Lebensganges; es kommt immer wieder an die Reihe, ärgert uns und treibt uns doch wieder zu neuem ernstlichen Streben.

Mir erscheint der zunächst mich berührende Personenkreis wie ein Konvolut sibyllinischer Blätter, deren eins nach dem andern, von Lebensflammen aufgezehrt, in der Luft zerstiebt und dabei den überbleibenden von Augenblick zu Augenblick höhern Wert verleiht.

30 参照：エッカーマン（2001）『ゲーテとの対話（中）』332ページ

Wirken wir fort bis wir, vor oder nacheinander, vom Weltgeist berufen in den Äther zurückkehren! Möge dann der ewig Lebendige uns neue Tätigkeiten, denen analog in welchen wir uns schon erprobt, nicht versagen! Fügt er sodann Erinnerung und Nachgefühl des Rechten und Guten was wir hier schon gewollt und geleistet, väterlich hinzu; so würden wir gewiß nur desto rascher in die Kämme des Weltgetriebes eingreifen.

Die entelechische Monade muß sich nur in rastloser Tätigkeit erhalten; wird ihr diese zur andern Natur, so kann es ihr in Ewigkeit nicht an Beschäftigung fehlen. Verzeih diese abstrusen Ausdrücke! man hat sich aber von jeher in solche Regionen verloren, in solchen Sprecharten sich mitzuteilen versucht, da wo die Vernunft nicht hinreichte und wo man doch die Unvernunft nicht wollte walten lassen. (...) ³¹

カール・フリードリヒ・ツェルターあて

ヴァイマル、1827年3月19日

このような場合、友が友になんと答えるべきでしょう。同じような災が私たちを固く結びつけたのだから、私たちの結びつきはこれ以上緊密ではありえません。このたびの不幸は私たちの間柄を変えはしません。これだけでも大したことなのです。

運命の女神たちは、千と千倍にしてもなおやってくる夜の昔話を語りあつてあきることがありません。長生きするというのは、多くの人より生きのびること。通俗喜劇なみに他愛もなくすぎてゆく私たちの人生行路で幾度かきかれるいまわしいきまり文句はこれです。この文句は何度もやってきては私たちに腹立たしい思いをさせ、しかしまた新たに真剣な精神に私たちをかりたてます。

私の身近な人々のグループは、巫女の書の束のように思われます。生命の焰に食い尽くされて、一枚一枚空中に散り失せ、残りの紙片は一

瞬ごとに価値をましてゆきます。先立つか後になるかはわかりませんが、世界靈に召されて上天に戻るまでは、活動を続けようではありませんか。その時がくれば、永遠に生きる神は、私たちがすでに自己の真価を示した活動に類する新しい活動を私たちに拒みはしないでしょう。もし父なる神がそのとき、私たちが地上ですすでに欲し、かつなしとげた正と善の追憶と余薫とを付与したまうならば、私たちはいよいよ迅速に世界機構の齒車にかみあうことになるに相違ありません。

エンテレヒー的（完成にむかって努力する）³²モノドは、休まない活動によってのみ自己を維持しなければなりません。この活動が第二の天性となるならば、エンテレヒー的³³モノドは永遠に仕事に欠けることはありません。こんなわかりにくい言い方をしましたが悪しからず。しかし、理性では及ばず、しかも不条理を認めまいとすれば、人は昔からこうした領域にまぎれこんで、こうした言い方で考えを伝えようとしたものです。（省略）³⁴

ツェルターはゲーテに3月11日にツェルターのただ一人残った息子ゲオルクの死のことを報告した。「このたびの不幸」は1812年にツェルターの養子フレリッケが自殺したことを指している³⁵。『ファウスト』第2部第5幕最後の場の天使たちの次の言葉は「絶えず努め励むものをわれらは救うことができる³⁶」という思想もこれに繋がる。ゲーテは宇宙の生活内容を、根源的素質の独自の発揮において、活動的な個体において求め、それをライプニッツの「モノド」、アリストテレスの「エンテレケイア」の名称で呼び、この意識に「永生」の信仰が結びづいている。それはゲーテの自然観照から究

32 筆者が「完成にむかって努力する」を「エンテレヒー的」に書き換えた。

33 筆者が「エンテレヒー的」を書き加えた。

34 ゲーテ（1981）『ゲーテ全集15』231 - 232 ページ

35 参照：FA10, 1028

36 ゲーテ『ファウスト2』485 ページ

極的結論である³⁷。この天使たちの言葉はファウスト全曲のモットーであり、自力による努力と天上からの愛と、両者によってファウストは救われるのである³⁸。ゲーテはさらに、1828年3月11日にエッカーマンと対話の中でエンテレヒーについて話している。この対話の内容はエンテレヒーと永遠とこの世の肉体についてである。

「つまり、どんなエンテレヒーも永遠の一部だよ。この世の肉体と結びついているわずかな年数のために老化することはないのさ。このエンテレヒーが、とるにたらぬ類いのものなら、それが肉体に閉じこめられているあいだに、あまり力を発揮できないだろう。むしろ肉体の方の支配に屈して、肉体の老衰とともに、それは肉体を支えたり阻止したりすることはできないだろう。けれども、すべての天才の人間のばあいにはそうできるように、エンテレヒーが強力なもの（mächtiger Art）であれば、それが肉体にみなぎってこれを生かし、単にその組織に作用してこれを強化し、向上させるばかりでなく、さらに、強烈な精神力によって、永遠の青春という特権を、たえず主張しようとするだろう。卓抜した人物において、老年になっても相変わらず異常な生産力の活潑な時期が認められるのは、じつにそこから来ているわけだよ。彼らにはつねに、一時的な若返りがくりかえし起るように見える。私が反復する思春期と呼びたいのは、じつにこのことなのさ。

「そうはいっても、若さはやはり若さだ。エンテレヒーがどんなに強力（mächtig）でも、肉体を完全に制するわけにはいかない。またエンテレヒーが肉体を味方にするか、敵に廻すかでは、大きなちがいがあがるね。³⁹

37 参照：エッカーマン（2001）『ゲーテとの対話（中）』332 - 333 ページ

38 参照：ゲーテ『ファウスト2』540 ページ

39 エッカーマン（2001）『ゲーテとの対話（下）』203 - 204 ページ

既にファルク対話において、ゲーテは靈魂について論じるために「モナド」という言葉を使っている。そこで「力強い」という形容詞を使い、「力強い（mächtigen）（省略）モナド」と「モナドのもっている意図がどれだけ強いのか」（wie mächtig die Intention）についても論じている。以上の1828年3月11日のエッカーマンとの対話の中で、ゲーテは靈魂について論じるために「エンテレヒー」という言葉を使っている。そこで、同じく「力強い」という形容詞を使い、「エンテレヒーが強力なもの」（mächtiger Art）と「エンテレヒーがどんなに強力でも」（mächtig）と述べている。「力強い」（mächtig）という形容詞は「モナド」あるいは「エンテレヒー」のもっている力、また影響力を意味している。ゲーテによると、それぞれの「エンテレヒー」のもっている力が異なることによって、その影響力も異なる。このエンテレヒーのもっている力が大きければ大きいほど、この人間が永遠の青春を経験することができ、一時的な若返りをくりかえしながら、思春期をさらに経験することができる。

ゲーテは1829年9月1日にも、エッカーマンと対話する際に「不滅」の問題について論じながら、「エンテレヒー」という言葉を使っている。そこで、また靈魂すなわち「エンテレヒー」の影響力について述べている。

私はゲーテに、ある旅行者が、神の存在の証明についてのヘーゲルの講義を聴いてきた、という話をした。そのような講義はもはや時代錯誤だという私の意見に、ゲーテも同調してくれた。

「懐疑の時代は」と彼はいった、「過ぎ去っている。今や神はおろか、自分自身を疑う人もいない。その上伸の本性或靈魂の不滅や靈魂の本質やそれと肉体との関係といったようなことは、永遠の謎であって、哲学者もこの点ではわれわれを前進させてはくれないのだよ。現代のあるフランスの哲学者は、大胆にも自分の論文を次のように書き出している。『人間が、二つの部分から成り立っていることは、周知のとおりである。すなわち、肉体と靈魂である。したがって、われわれは、肉体から考察

をはじめ、つぎに靈魂に移りたい。』ただ、フィヒテはすでに一步先を歩いている、次のような言い方で、もうちょっと賢明にこの問題から身をかわしているよ、『われわれは、肉体としてみた人間と靈魂として見た人間について論じてみたい。』彼は、これほど密接に結びついて一体化しているものは、切り離そうにも切離せないことを、よく感づいていた。カントは、今さらいうまでもなく、いちばんわれわれにとって有益だね。つまり彼は人間の精神がどこまで到達できるかを見定めて、解決できない問題には手をつけなかったからさ。靈魂不滅の問題については、あきもせず哲学されつづけてきたが、一体どれだけ進歩があったというのだらう！——私は、われわれの永生については、疑いをさしはさまない。自然は、エンテレヒーなくして活動できないからね。しかし、だからといって、われわれ誰もかれもが同じように不死というわけではないのだ。未来の自分が偉大なエンテレヒーとしてあらわれるためには、現在もまた偉大な⁴⁰エンテレヒーでなければならない。⁴¹

ここで、ゲーテはもう一度「靈魂不滅」と「生命の永遠性」への信仰をはっきりと述べている。その上で、来世の話もしている。すなわちゲーテによると、現世で偉大なエンテレヒーでなければ、来世でも偉大なエンテレヒーになることができない。これはゲーテの輪廻概念に関する考えでもあるといえる。ゲーテはさらに1830年3月3日にエッカーマンと「エンテレヒー」について次のように対話している。

私たちはよも山話をつづける。そのうちに、またしてもエンテレヒーの話になる。「個性が決して譲歩しないこと、また人間が自分にふさわしくないものをはねつけることが」とゲーテはいった、「そのようなもの存在している証拠になると思う。」私も数分前から同じことを考えて

40 訳されていないので、筆者は「偉大な」という言葉を書き加えた。

41 エッカーマン (2001)『ゲーテとの対話 (中)』136 - 137 ページ

いて、ちょうど口に出そうとしたところなので、ゲーテのその言葉を聞いて私の嬉しさも倍加した。「ライブニッツは」と彼はつづけた、「こうした自立的な個性について同じような考えをもっていた。もっとも、われわれがエンテレヒーという言葉であらわしているものを、彼は単子（モナド）と名付けたがね。」⁴²

この対話で、ゲーテにとって「モナド」と「エンテレヒー」は同じものだったということが明らかになる。彼は「エンテレヒー」の存在を確信し、疑わなかったのである。

おわりに

本論文では、ゲーテの輪廻概念と靈魂不滅思想について論じた。ゲーテは輪廻及び靈魂不滅を信じていたことについて議論し、ゲーテが「輪廻」や「靈魂不滅」、「モナド」や「エンテレヒー」に関して発言した箇所を時系列でまとめ、多少の注釈を付して解釈した。

第1章では、若きゲーテの輪廻概念を紹介し、第2章では60代のゲーテの輪廻概念について論じ、ゲーテのモナドと靈魂不滅についての考えを示した。第3章では晩年・最晩年のゲーテの靈魂不滅と永遠性の思想を紹介し、精神の永遠性やエンテレヒー、モナドやエンテレヒー的モナドについて論じた。

以上のことから、ゲーテは若い頃から最晩年まで輪廻と靈魂不滅に関心を示し、信じていたことが分かる。シュタイン夫人との出会いが、若きゲーテにとって輪廻に関して考えるきっかけとなり、後に、詩や手紙の中で取り上げるほど、強い関心をもっていたと言える。さらに、ヴィーラントの死はゲーテが60代の時に輪廻について論じるきっかけとなった。その際、ゲーテが自身の考えを表現するため、ファルクとの対話の中では、ライブニッツの「モ

ナド」という哲学的用語を使い、晩年と最晩年には、靈魂不滅、永遠性、輪廻についての考えを表現するために、「モナド」という哲学的用語以外に、「エンテレヒー」というアリストテレスの哲学的用語も同じ意味で使っている。さらに、ゲーテは「エンテレヒー的モナド」という複合語を作り出した。彼にとってはすべてのものが「モナド」または「エンテレヒー」をもち、このモナドが同じ法則に従って、内在している意想や使命の道が前世・今世・来世にわたり存在し、成長している。

結論を言えば、ゲーテは若い頃から最晩年まで、輪廻と靈魂不滅に対する考えを変わずもっており、信じていたが、詩的な表現や哲学的用語を用いながら、細かく表現するようになっていた。輪廻概念と靈魂不滅の思想はゲーテの生命観を理解する上で、不可欠なものであると言える。

今後の研究課題としては、ゲーテの生命観や輪廻概念と靈魂不滅の思想に影響を与えた他の哲学者の思想、あるいは宗教概念に考察を加えてみたい。

引用文献及び参考文献

(ドイツ語文献)

Eckermann, Johann Peter: *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahres seines Lebens*, hrsg. von Christoph Michel, Bd. 12, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1999. (略記号: FA12)

Goethe: *Gedichte*, hrsg. und kommentiert von Erich Trunz, C.H. Beck, München, 1974.

Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche 23. Mai 1764 - 30. Oktober 1775. Hrsg. von Wilhelm Große et al. Bd. 1, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997. (略記号: FA 1)

Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche 7. November 1775 - 2. September 1786. Hrsg. von Hartmut Reinhardt et al. Bd. 2, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997. (略記号: FA 2)

Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche 10. Mai 1805 - 6. Juni 1816. Hrsg. von Rose Unterberger et al. Bd. 7, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1994. (略記号: FA 7)

Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche von 1823 bis zu Goethes Tod. Hrsg. von Horst Fleig et al. Bd. 10, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1993. 略記号: FA 10)

- Goethe Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche 27. Oktober 1819–26. Dezember 1822.* Hrsg. von Dorothea Schäfer-Weiss. Bd. 36, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1999. (略記号: FA 36)
- Johann Wolfgang Goethe Tagebücher. 1813 bis 1816. Text.* Hrsg. von Wolfgang Albrecht. Bd. 5,1 Verlag J.B. Metzler, Stuttgart, 2007. (略記号: GT 5,1)
- Friedrich Wilhelm Riemer, *Mitteilungen über Goethe*, auf Grund der Ausgabe von 1841 und des handschriftlichen Nachlasses, Insel-Verlag, Leipzig, 1921.

(日本語文献)

- エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (上)』 山下肇訳 岩波書店
- エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (中)』 山下肇訳 岩波書店
- エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (下)』 山下肇訳 岩波書店
- ピーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録 2』 菊池栄一訳 白水社
- ゲーテ (2009) 『ファウスト 2』 相良守峰訳 岩波文庫
- ゲーテ (1979) 『ゲーテ全集 1』 「詩集」 山口四郎訳 潮出版社
- ゲーテ (1981) 『ゲーテ全集 15』 「書簡」 小栗 浩訳 潮出版社